

訓蒙修身書

田村初太郎校閱
福田宇中編纂
六

72
388

館
大日本教育會書館

大日本教育會書館			
一	二	三	一
册	號	架	函

K/10/1
184
6

明治十五年四月開雕

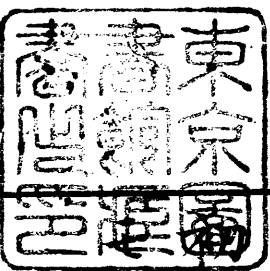
訓蒙脩身書

積善館藏梓

訓蒙脩身書第六

緒言

此編ハ善行、禮儀、言語、智略、正直、工藝ノ
六章ニ分シ、前卷ニ於テ同目ノモノア
レト往々其高キニ至ラシムルモノナ
レバ重複ニ關セズ之ヲ記セリ此卷ハ
等科第三年後期生徒ノ用ニ供スル
ノナリ



東京
積善館
訓蒙脩身書
第六
緒言

明治十四年十二月

編者識

訓蒙修身書第六

田村初太郎校閱
林 和太郎訂正
福田宇 中編纂

第一章

善行 慈愛

財畜
○財に畜ふして能く善を為さむれと見ざるなり、誠あらばして能く善と為さむれを見ざるなり、程子

餘救
濟暇
書讀

○餘りあるを待て、人を救はゞ、必ぞ人と濟ふの日なり、暇あるを待て、書を讀まば、終に書と讀む時なり、
紳瑜

負登

確

駿馬

鞭策

墮

○善をなすは、重きと負ふて、山ふ登るが如し、志已に確しといへども、力猶及ばざるを恐る、惡と為すは、駿馬に乗て、坂を走るが如し、鞭策を加へども、雖も、足亦止むこと能はず、
省心雜言

○人の我に負くを以て、善と為は、心の心を墮

報

患難
禍災

壓榨

馥郁

禍難

苦痛

福慶

をことなかれ、其徳を施ふに當りて、唯自ら我心の忍びざる所と行ふのみ、未だ嘗て報と責ざるなり、たとひ善らざる者に遇ふも、唯一笑ふ付せよ、
金言

○人此善性を發育せるものも、患難禍災より善きなるし、たとひば、香草は壓榨せられて馥郁たる、香氣を散るが如し、
西洋品行論

○禍難は、苦痛と覺へ、志むと雖も、實は福慶に積塊なり、然れども、禍難の中より、福慶を

洪鑄錢局

視出を人少なし予は禍難を以て予と試るの洪鑄をなし予と鑄る此造錢局と思ひり、同上

羅馬

○羅馬帝タイタスは其志善を行ふ不急なり、毎夜晝間に行なへる所と省視し或を一善なけむば懊惱して曰く、嗚呼予一日を失ひり、西裨雜纂

省視

懊惱

嗚呼

晉陵梅鱗

○晉陵の梅鱗といふ人、平生義と重んじ、慷慨ふして施しを好む、中年に至れども子な

親戚貧窮

郷黨

家産巨萬

善を嗜むこと益篤く、親戚貧窮の者何れば、をなほち之を救ふ、郷黨の人皆仁人長者と以てこれと頌む、後二子を産み、家産巨萬ふして、壽七十に至り、

邵康節伯温

○宋の邵康節といふ人、其子伯温ふ告げ曰く、汝固より、當に善を為ひべし、亦須らく力と量り、之を為むべし、若し力と量らざれば、善と雖も、亦為ひ得からず、畜徳録

○ホーランドの勇者、ゼ子ラル、コッシユスコ

慈善

齋

路傍
帽恩惠

給與
馴

を、慈善なる人れり、一日僧ふ美酒を贈らんとて、從者ゼルトルトに命トて、己まが馬ふ乗せ、齋一遣りしに、從者反命して曰く、僕復た主君此馬ふ乗る能はざるなり、其故を、路傍の貧人帽を脱し恩惠と乞ふときは、馬留りて進まば、初め其意を知らざれども、良久悟りて、公の常に此馬ふれりて、貧者に物を給與せらるに馴さて、此の如くなるべし、然れども僕錢を齋らさざりゆへ、これと給ひ

厭足

瞿嗣興

常熟
米穀
飢饉

炊煙

る為をして、馬の心を厭足せしめ、使を勤め歸れりしに、こまをもつて、コシユスコ此慈善なるを想ふべし。

○瞿嗣興といふ人は、常熟といふ所にて、米穀を賣り、世と渡りしが、其心極めて慈悲深く、飢饉の年に、貧人錢五百文を持ち、米を買ふ者あり、瞿嗣興を、其錢を受け取り、箱に納め、一貫文と見誤りし様にもてなし、多量の米を、與つてかへぬ、又貧人の、朝夕炊煙

訓蒙抄

卷之三

三

の上らざるを見て、米と與一んと思ふときは、其家の前と過ぎ、窓より錢を投入れて、誰が所為とも知らざる様ふなりける。さすれば、餘慶積善の家ハ、いよく富み、餘慶を子孫不貽し、身は八十四此高齡にて終りぬ。

第二章

禮儀 謙遜

私室 傍觀

○人の私語を見ては、耳を傾て、竊に聽くこと勿れ、私室ふ入りては、目を側て傍觀をる

ことなかれ、

習是編

兇惡

○年高くなりて、徳なく貪極りて、恥なく兇惡にして、禮をかへりみび、愚ふして禮と明ふせど、此四等の人を、共に較をへからば、上○假令微賤なる人にては、皆誠敬を以て、これと待つづし、忽ち慢るをからず、

勤儉 衰門

○家長禮を知せば、男女勤儉なり、假令衰門といへども、亦必ぎ興るにあり、其一時の貪富を、未だ論ざるに足らば、

貪富

紳瑜

儀容

親睦
奇服
怪狀
威儀

○凡そ人儀容なかるづらば、儀容なきも
れを、人と親睦をること能はざるとひ徳儀
才智ある人も、奇服怪狀威儀を失ふも此
は、世人の親睦少かるづらば、
智氏家訓

尊敬

○儀容あるものは、才能人劣るも、才能何
りて、儀容なきも此に比をまば、世人の尊敬
は、却て優らん、

景慕

○儀容ある人を、一見して、他人に景慕の思
を起さしむ、

家齊

人倫

慎

心喪

○凡そ身をおさめ、家と齊ふるに、禮を以て
人倫一し、禮とは、人倫の作法なり、心ふつ、し
みあり、身に則あると、禮といふ、慎しみなく、則
なきまば、人の心を喪なひ、身れ且ざあし、
人ふ交まば、人倫れ道た、ざるなり、

正路

○禮を行ふを、むつかし、苦しき事にあら
ば、事毎不行なふべき、筋目に從ひて、行ふゆ
一に、心安く、身もおだやかなり、平坦なる正
路を行くか如し、故小人禮あまば、安し、禮な

訓蒙修身書

卷六

まば危しこゝを以て、人たるもの、禮を行なはざるべからず。

○人常不禮を守りて、内行を正しくも、内行正しからざれば、外に善を行ふも、皆詐りとなるべし。是禮を行ふの初なり、内行を正しくも、父子兄弟夫婦此間、むつましく敬ひあり、家人を憐みて恩あり、人と遣ふにせはしからば、ゆるかせならむ財を用ふるふおこらず、やぶさうならび、色慾とつ、

夫婦

淫行

しみ恥を知りて、淫行なかるべし。是内行此正しきれり。

見舞

○父母ふ仕へて、常に力と盡し、時々の見舞、膝下此つかえ、怠らば、古語に夕づふ定めて、朝にのつりみるど、いゝるが如くを、是父母ふ仕ふるの、禮儀れり。

膝下

愛憎

○兄弟に睦まじく、夫婦和して、別あり、妻と導く不禮を以てし、子弟とおし、いゝあゝめて、愛と過ごさむ、彼是につきて、愛憎の私なく、

子弟を導き、禮とつとめ、書を読み、藝とならふに、急りぬからむづい。

惡事

○家人は、禮儀を正しくして、惡事と防ぎ、いまいむづい、惡事出來て、後いまいむるは、おそし、禮を未然とふせぎ、法は已然をいまいむといひ。

盛衰

○家の盛衰は、家法此正しくなるを盛とし、家法此をたると衰とし、富貴なるとして、必しも盛とすづからむ、貧賤なりとて、必しも衰

とをづからび、家の盛衰は、亦禮儀此行はる、と行はれざるにふよきり。

○人の我に厚からんことを、望まざりて、我を必ず、人小厚くをれば、其交り益ふのくぬるものなり。

○幼くして、肯て長に仕へず、賤しくて、肯て貴に仕へば、愚ふして、肯て賢に仕へば、これと人の三不祥とを、總て是傲氣此致を所なり、世人先づ、傲氣を除き去り、纔ふ事と成す

不祥
纔傲氣

を得べし、

賢愚 尊貴 敬禮 局促 恐縮 陋態 教育

○人賢愚となく、尊貴の人を見て、敬禮せざるも此稀なり、然れども達士の敬禮は、自然に出で、局促の状なく、野夫は敬禮を、恐縮の陋態をなす、傍人より一見して、其教育の有無を知るべし、

親善 禮讓 學問 道德

○世人は親善をらんふは、禮讓容儀を欠くべからざることを、恰かも尊敬と得るに、學問道德を、要するが如し、

學藝 瑕疵

慶悼 尊卑 容貌 歡傷 抑揚 注意 營業 慶吊

面談 迂曲

○言語容儀は、學藝を飾り、瑕疵を補ふに於て、其功最も大なり、
○禮儀不達したる、人の語れ、慶悼に用ひ、尊卑に對して、差別あるに注意し、又其容貌の歡傷聲音の抑揚等も、注意をべし、
○書状は、營業慶吊ともに、用ひざるべからざるもこれにて、日用の尤も欠くべからざるものたり、書状の主意へ、達意を旨とし、讀み易く、事理は明白ふして、面談をる如く、迂曲

の語なからんことを要す。

○遠路小書札を寄るに、前日ふ於て、之を成をづ、数をるに臨で、匆々之をなせば遺漏多し。

○書翰の折り方、封ト様、名充等に氣をつけ、粗略此事なかるべし、一封の書ふよりて、他人の好惡を生し、轉トて、身此利害となるものれり。

○今の人此病痛は、只是一個の傲此字ふて、

遠路
書札
臨
遺漏

書翰

粗略

好惡
利害

病痛
傲

謙抑
對症
外貌
恭敬
歛然

吳琳
吏部
致仕

舉動
旁舍
秧拔

千罪百惡、皆傲より生じ、謙抑を、乃ち、是對症の藥なり、謙抑は但外貌此恭敬のみならず、其自ら視ること歛然、已ま不足此處あり、不足の處あるを見て、纔か小能く、己と虚くして益と受く、
王陽明

○明の吳琳といふ人は、吏部となりけるが、故あつて、官を辭し、致仕して、家居せり、帝使者と遣はして、其舉動を察せしむ、使者潜か小琳の旁舍に至りし、一農人の秧と抜き、

田に布くと見る
端正ふ其貌甚た端正
尋常なり尋常の農人
にあらび使者問
て曰く此地ふ呉
琳尚書といふ人
有りや其家何く
に在る農人手を
歛め禮とれして



驚
曰く琳を即ち是なりと答ふ使者驚き歸り
て其状を白を帝これと重んじて復た召し
出し原官ふ復せしめしむ
○宋の潘叔度といふ人は呂伯恭と同年進
士たり叔度を年長トて其學伯恭ふは如
び然るに首を俯し弟子に禮と執りて之に
師とし仕し聊難む色なきを朱子はこまを
見て稱嘆せられたり
稱嘆
忠實
○端正忠實なる人を外と飾らば自己の用

宋史 卷之三十三

度を、儉節をる此勇あり、自己の分限と、守るの勇あり、蓋し有ると、有と、無を、無きとし、内外一致、表裏間てなきは、男子の心腸にて、尊貴なる品行を、建つる此基礎なり、西洋品行論

奴婢 ○主人の奴婢を使ふ、常し禮法を嚴しくも、一禮法忽かせなれば、悔りて罪を犯し易し、故し彼をして、侮らば、怠らぬめざるを要す、然れども、不慈にして、彼と苦しむべからず、

居處 夷狄 ○居處恭しく、事を執りて敬み、人と與に、て、忠なることは、夷狄ふゆくと雖も、棄つべからず、孔子

容貌辭氣 華采 禮讓 恭敬 ○容貌辭氣は、徳行の華采なり、西諺

○人間の交りハ、禮讓を以て、相互ひに恭敬をると常とひ、たと一は、書翰と遣るハ、同輩此ものなりと雖も、彼を貴君といひ、我を從僕といふが如し、内實と論むれば、不當し屬をせども、必竟彼人を敬するものにして、即

從僕 必竟

ち禮讓といふべし、

會合 座讓 謙遜 親切

○人一所ふ會合をる時を、座を譲り、他人の語了ると待て、我言を發せると、禮といひ、凡て相互ふ謙遜して、親切なることを、主とをべし、

定度 粗暴 節義 追從

○禮讓も、他の徳といひとしく、定度あり、恭敬に過るは、猶粗暴に如くふして、過不及の弊等しきなり、故に真の禮讓を、節義ありて、追從ふ至らざるれり、

不肖 賤者 怨

○不肖を以て、人と待つ、愚者といひ、ども甘んぜび、非禮を以て人を處を、賤者といひ、ども亦怨む、
習是編

第三章 言語

交際 顔容 德行 兩端 虚言

○言語の用たる、天より與ふる所れものに、して、人々此交際ふ、便ならしむるためなり、
○忠順なる言語、忠順れる顔容は、大いふ德行の價をして、高からしむるなり、

○兩端を持てる語も、殆んど虚言に近し、即

主意 ち人を欺かんとするの主意あり、

駟馬 ○一言妄りに、發をれど、駟馬も追ひ難し、善

きことども、惡きことども、皆口より出づ、慎めば

過少 過少なく、禍なし、故ふ人の身は慎みを、口を

慎むと、第一の勤めといひ、言多けば、口の過

多く、人ふ惡まれ禍起る、殊に人と譏るは、大

惡事 なる惡事なり、戒めて、人の非をいふべから

ず、

信實 言行の信實ハ、人ハ品行に於て、身體の脊

脊骨 骨あるが如く、是なけば、立つこと能ハば、

談論 尋常の談話なるに、殊更ふ誓ふて、その實

殊更 論辯を唱へ、これ虚言ならざるを、論辯をるは、却

つて疑ひと、招くの基あり、

表衣 ○言語文書は、心は表衣なり、故に此二者も、

善良 亦善良ならざるべからず、

○衆人の嫌惡を、欲せざるも、これを、須ら

く、言語と謹むべし、夫の舌と放に、をるも、此

を、嫌惡を來むの、藏府なり、其辯舌は、建河の

建河 辯舌 藏府 須惡 衆人 善良 表衣 論辯 殊更 談論 脊骨

制限

如くなるも、長談ハ必ズ嫌悪と免る、能は
び、蓋し凡事ハ制限なきは、天理の惡ム嫌ふ
所なればなり、智氏家訓

輕侮
調笑

憾
諧

○人少く才あるも、これを、往々好で人を輕
侮し、人と調笑を、失徳といふべし、侮と受る
者、徒らに己まじ、必憾みて、之を諧る、即ち自
から諧るべし、

第四章 智略

畫工

○ゼイムストル子ルは、英國にて、高名の畫

圓天井
繪當
高架
揮毫
從事
眺運
端知
僕落
此様
暇合
持具
繪付
投進

工なり、「シントポフル」といふ寺の圓天井に
繪をかくに當り、高き所ハ足場を架し、日々
揮毫ハ從事せし、或日自ら其繪を眺め、
種々工夫と運らし、覺一む知らじ、後ろれ方
に寄り、今一步ふして、足場の端より、落んと
せしが、傍らなる、僕の者、此様を見て、救はん
とをれど、其暇なく、持合したる、繪此具の皿
と、天井の繪ハ投付けたまはば、トル子ルを大
ひに怒り、遽て繪の方へ、進み寄り、僕の罪と

川原... 十五

舉動 責んごしけるに、其舉動の次第を聞き深く
機轉 禮を述べ、其機轉と感トたり、

合戦 ○千八百十一年の十月、英佛合戦此時、佛蘭

西の巡邏船、ノルサングルランドの海岸

にて、ガルロンといふ一る、英吉利の小船を乗

取り、其乗組の者と、生捕にして、佛蘭西船に

移し、老人一人と、十三歳此小兒一人とと、本

船に残り置き、新たに佛蘭西の水夫六人を

港

乗込ませて、本國の港に、此船を乗廻をづし

分捕 命トたり、分捕

の船は、乗組八人

にて、佛蘭西船に

別後 別れし後、フォルス

といふ河口にて、

風逢 大風ふ逢ひしか

ば、六人の佛蘭西

人を、固より英吉

利に、老人も、此邊



模様の海は模様と知らび、折しも夜を、真の暗ふ
 磁石て、船中に油の貯も盡き、磁石を見て、方角と
 吹漂せん方なくして、唯風ふ吹れ、漂ひが、彼小
 航海兒は、嘗て此邊と兩三度航海し、海岸の模様、
 烽火山の形なども、心得たるにより、島の烽火と
 見て、フアルスの河口なるを知り、乃ち自から
 舵と取り、マルカレホフといふ所へ乗込
 軍艦て、英吉利の軍艦に近付き、大音にて、佛蘭西

聲應

人を生捕たりと呼ぶ聲に應じて、軍艦より、
 兵士來り、彼六人の佛蘭西人を捕つて、小船
 は再び、英吉利人れ手に返りたり。

第五章 正直

譽

親切

○人正直なる譽を得んと欲せば、約をる所
 の事を、親切ふ為ると要す。
 ○人不直れ所行をなしたる者のみ、惡とを
 べからば、これと行ふの意ある者も、亦惡と
 すべし。

禁

兵艦
燒殲
奇計

合衆
國
戰爭

○たごひ有益の事といづとも不直は行ひ
を、これを禁をす。

○昔アゼンス國の人スパルタと戦ひ
時、竊不敵の兵艦と燒殲を此奇計ありしが、
アリスチデスといふ人の説に、これを不直
の事なりとし、益ありといふども、終ふ行を
ざりしとれり。

○合衆國の第一大統領、ワシントン一友あ
り、獨立戦争の時、英軍に向て、共不戦ひ、日々

座右

温厚

關

衆皆

抗抵
陷謀

處置

座右にあつて、親しみ交りけるが、此友人農
夫ふして、温厚なるも、此なきとも、他の才能
なし、會ワシントン専らにをる、官吏一人關
げたれば、衆皆彼の人補せらるべきと思ひ
り、然るに、一人あり、曾てワシントンの議ふ
抗抵し、且ワシントンを陷んと謀りたるも
のにして、又ワシントンの親友と仇なりし
が、ワシントン彼の人は才能用ゆべきと知
て、之を其任ふ充てたり、或人を此處置を愚

刑罰

大

十

こ一、ワシントンに告げたる。不答て曰く、我赤心友を愛するは、我赤心より出づ。然るに彼事

不任むる才能なし、彼仇人を此才あり、故不我之を擧るのみ、公道に問ふは、私愛及ハざるなり、我今日、ジヨール、ジ、ワシントンに、非

ど一、合衆國の大統領なり、若一、ワシントンたらば、私友と用ゆべけれども、大統領たらば、私を為むべからず、

○一農夫其子とニ、ウヨルクの、一商家不屬

屬

大統領

務廬 小絹 廬衣 小廬 廬

携

一たるが、其子務を善くせり、一日一婦人の廬不來り、絹衣と買ひたり、に彼小廬其衣をた、みたるが、穴あると見て、婦人不之を示して曰く、我君に此穴あるを示せば、吾の務なりと、婦人之と見て、買ふことと止めたり、主人之を聞き、大いに怒り、直不、小廬の父に書と遣し、携一歸る一と告ければ、父曾て、其子善良なりと思ひ、に其書と見て、大いに驚き來り、其故を問ふ、主人告るに、前

物買 細 閱

日の事を以て、且曰く、此兒商人也才なし、客れ物と買ふときは、彼も自ら細うに、これを閱をば、若し其穴と知らざるは、彼の誤なり、父曰く、然らば吾子此誤りを、是のみか、曰く然り、曰く然らば、我益々吾子を愛せん、向後汝の家此恩と受るを、欲せむといひ携一歸せり、

第六章 工藝

忍耐

○小技といども、亦忍耐の工夫を要を

卓絶 偶然

勉強

争賽

全成

自脩

超

西 諺

○人の卓絶此名を成むは、偶然天幸に非ずして、專一勉強なる由るれり、

○善徳を、藝事と争賽する中にあり、利欲不汲々たる中ふは、あらざるなり、彌爾居士氏

○才は天より、受たれども、之を全成するは、自脩の功による、事なせば、天才と恃まざりて、人力を盡をば、西 諺

○藝業と脩むる人を、假令天才衆に超ゆに

雖も久しきに堪へ、之を勉強するに非ざれば、成就する地位に至ること能はず

○ケノバは伊太利國の人なり、三歳にして父を失ひ、母ふ仕一て孝なり、されども家素より貪なれば、母他家に再醮してケノバと、其祖父某に託せり、祖父ケノバに己れの業を續がしめんと、乃ち彫刻及び模畫と學ばしむるふケノバ天才英敏にして、一を聽て、十と知り、速に其業に進歩せり、一日祖父或富

再醮

彫刻
模畫

進歩
富家

玩物
珍奇
獸形

思慮
妙按

夥多
乾酪
獅子

憤叫

精巧

家に招かれ、机上の玩物に供する、珍奇な獸形を作らんことを求められ、家にか一り、日夜思慮をこらせども、妙按なし、因てケノバを招き、之を謀りけしむば、ケノバ曰く、我曾て、夥多の乾酪と蓄り、之を用ひて、獅子を作らば、必其器に適ふべしと、乃ち積みて、獅子憤叫の状を作さし、祖父之と見るに、其妙を盡さざるなし、祖父大ひに喜び、即ち之を富家に贈りければ、富家もその精巧に感ず至

精刻
四境
工師

重の珍物となせり、是よりケノバ精刻の名
四境に聞へ、伊太利第一の石工師と稱せら
れたり、時年僅十三歳にてありしと、

訓蒙修身書第六終

明治十五年三月十七日版権免許
同 四月 出版發兌

徳島縣士族

福田 宇中

大阪府東區安土町四丁目
拾壹番地寄留

大阪府平民

華井 卯助

府下東區安土町四丁目
拾壹番地

製本發賣所

七山九鏡五厘

訓蒙修身書

田村初太郎校閱
福田宇中編纂
七

157

272
388

館
函
架
號

館 函 架 號			
一	二	三	一
冊	號	架	函

大日本教育會館

K110.1
295
2